プラン・ニュース［2020 Autumn］NO.115

PLAN NEWS



国際ガールズ・デーに寄せて

STOP THE SETBACK

～歩みを止めない。後退させない～

特集

新型コロナウイルス感染症への取り組み

ガールズ・プロジェクト

エチオピア「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクト

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

国際ガールズ・デーに寄せて

STOP THE SETBACK

～歩みを止めない。後退させない～



「新型コロナウイルス感染症により、人生のあらゆる機会が、
3カ月や6カ月といった短期間ではなく、
永遠に奪われてしまうとしたらどうしますか？ これは、
世界の何百万人もの女の子や若い女性たちに実際に起きている現実です」

（プラン・インターナショナルCEO　アンネ・ビルギッテ・アルブレクトセン）

3月11日、世界保健機関（以下、WHO）が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下略）の流行を「パンデミックとみなせる」と発表してから約半年。世界各国で感染者・死亡者数が増加し続けており、WHOの発表によれば、感染者は2，600万人・死亡者87万人を超えました（9月6日時点）。

アメリカやヨーロッパなど先進国での感染拡大が顕著だった最初のステージから、ブラジルやインドなどプランが活動をする地域でも急激に感染者の増加が続いており、予断を許しません。こうした状況のなかで、女の子が教育の機会を失ったり、ジェンダーに基づく暴力に苦しむなど、さまざまな危機に直面していることが明らかになってきています。

「女の子の権利」や「女の子のエンパワーメント」の促進を、広く国際社会に呼びかける10月11日の国際ガールズ・デーを機に、プランは、これまでさまざまな国や機関、NGOがともに取り組み、改善してきた環境を後退させてはならないと一層強く訴えます。

これまでの歩みと現状の危機について、解説します。

教育

ユネスコの調査によると、これまでの取り組みにより、学校を辞めてしまう女の子の数は、20年前に比べて7，900万人も減りました。また、2人に1人だった中等教育への女の子の就学が、3人に2人になるなど、大きな改善が見られました。（※1）

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、世界中の多くの学校が休校を余儀なくされ、**最大約15億人の子どもたちが学校に通えなくなりました。**マララ財団は、この危機に**約2，000万人の中等教育を受けていた女の子が、学校を中途退学する**だろうと警告しています。（※2）これは女の子が家事労働の担い手となり、十分な自宅学習の時間がとれなくなることや、仕事を失った家族が子どもの教育にお金をかけられなくなるためです。さらに、女の子が家計を助けるために早すぎる結婚をしたり、働きはじめることなどがあげられます。



「友達が恋しい」と訴えるの女の子（ペルー）

※1:UNESCO Institute for Statistics, September 2019.
※2:Malala Fund. Girls' Education and Covid-19,2020.

有害な慣習

世界では、毎年2億人の女の子や女性が女性性器切除（Female Genital Mutilation/Cutting、以下FGM／C）の施術を受けると言われています。こうした有害な慣習をなくすために、プランをはじめ多くの国連機関、行政、NGOが長年活動を続けてきました。プランがユニセフやUN WOMENなどと共同で発表した調査レポート「A New Era For Girls（コラム参照）」によると、FGM／Cを実施している国・地域で施術を受けた15～19歳の女の子の割合は、過去25年で減少しています。

しかし、休校や都市封鎖によって女の子の家にいる時間が長くなり、平時であれば避けられた施術が**今後10年で200万件実施される**可能性が国連により指摘されています。（※3）仕事を失ったり、経済的に苦しくなったりした施術師が、FGM／Cの施術を行うことで収入向上を図ったことも一因となりました。新型コロナウイルス感染症の予防接種をすると偽って医師のもとに連れて行き、FGM／Cの施術を受けさせたケースも発覚しました。



FMG/Cの撲滅のために活動する女の子（シエラレオネ）

貧困と社会的保護の欠如

経済が悪化すると、早すぎる結婚や人身取引という形態の搾取が増えてくることが予測されます。これまで、早すぎる結婚をした女性の割合は、1995年の4人に1人から約5人に1人へと、世界的に減少傾向にありました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響による経済苦などにより、**2030年までに、1，300万人もの女の子の、早すぎる結婚が増える**とされています。（※3）実際に、休校で勉強の機会を失った女の子が、結婚持参金を得るために結婚させられたというケースも報告されています。また、家事や家族の世話などの負担が急増したり、何百万人もの女の子や若い女性たちが、人身取引や家族を助けるためのサバイバル・セックスに従事したりするリスクがあるといわれています。



13歳で結婚・出産した女の子（シエラレオネ）

性と生殖に関する健康と権利

過去25年で、15～19歳の思春期の女の子の早すぎる出産は、世界平均で1，000人あたり60人から44人へと減少しています。（※4）しかし、国連人口基金（UNFPA）によれば、休校や外出自粛のなかで、**4，700万人以上の女性が避妊具・薬を手にできなくなり、700万件もの望まない妊娠が起こる**と試算されています。（※3）

この背景には、感染拡大防止のために医療機関の閉鎖や医療サービスのアクセスが制限されること、休校によりやプランのようなNGOの活動がストップしてしまい、思春期の女の子に必要な性と生殖に関する情報が行き渡らなくなることがあげられます。



難民キャンプで暴行され出産した15歳の女の子（ウガンダ）

「誰一人取り残さない」世界に向けて

WHOのテドロス事務局長は7月27日、新型コロナウイルス感染症について、これまでWHOが宣言した世界的な健康危機の中でもっとも深刻だと述べるとともに「新型コロナウイルス感染症は世界を変えた。人や地域を、国同士を結び付けるとともに、ばらばらにした」と述べました。

しかし、こうした緊急時こそSDGs（持続可能な開発目標）が掲げる「誰一人取り残さない」取り組みが必要です。プランは、新型コロナウイルス感染拡大防止を重要な使命として、特に影響や被害を受けやすい子どもたち、女の子たちなどに支援を届けるため、今後もさまざまな対策を講じていきます。

国際ガールズ・デーのイベントをライブ配信します！

2020年10月7日に、東京藝術大学デザイン科准教授でアーティストのスプツニ子！さんと国際協力・ジェンダー専門家の大崎麻子さんとのトークイベントをライブ配信します。コロナ禍で世界の女の子たちが直面する課題に目をむけ、思いを馳せる大切さを伝えるとともに、日本の女の子たちへのメッセージを発信いただきます。

日時：10月7日（水）　19時～20時
ライブ配信については、プランのウェブサイトをチェック！

これまでの歩みがわかるレポート「A New Era For Girls」

1995年に北京で開催された第4回世界女性会議（北京会議）から、25年間の女性の状況と進捗について、プラン・インターナショナルとユニセフ、UNWOMENが調査レポートを発表しました。

調査レポート（日本語）はこちら



※3:UNFPA; Impact of the COVID-19 Pandemic on Family Planning and Ending Gender-based Violence, Female Genital Mutilation and Child Marriage,2020.
※4:United Nations Children's Fund, UN Women and Plan International,A New Era for Girls: Taking Stock of 25 Years of Progress, New York, 2020.

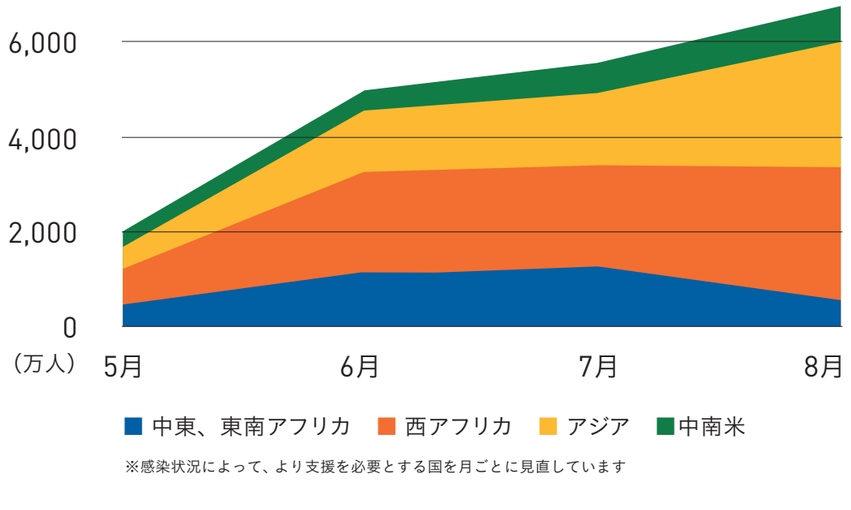
特集

新型コロナウイルス感染症への取り組み

プラン・スポンサーシップの「信頼関係」と「仕組み」を生かした迅速な支援

新型コロナウイルス感染症の拡大をうけて、プラン・インターナショナルは、
これまでに全世界で約6,735万人（8月28日現在）の人々に対して支援を行ってきました。
移動が厳格に制限されるなか、迅速かつ柔軟に対応できたのは、
プラン・スポンサーシップで日ごろから地域の人々や行政などとの「信頼関係」と、
子どもクラブや保健・衛生ボランティアの存在といった既存の「仕組み」があったためです。
感染防止対策を最優先に
おもに5つの柱で取り組んできた、これまでの活動を振り返ります。

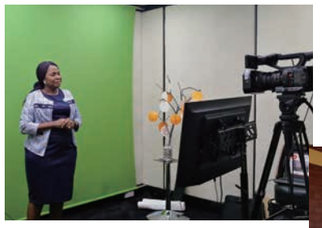
新型コロナウイルス感染症対策でプランが支援した人の数



※感染状況によって、より支援を必要とする国を月ごとに見直しています

1 女の子たちが学び続けられるように

前ページでご紹介した通り、休校などにより一度学校に行かなくなった女の子は、復学するのが非常に難しくなります。そのためプランは、教材やマスメディア、オンラインを活用して子どもたちが休校中も学び続けられるための支援や、復学した際に安心して学校に通えるように手洗い設備やマスク、生理用ナプキンの準備などを行いました。



←ガーナでは、政府系教育機関とともにテレビやラジオなどのオンラインプログラムを実施。9月に学校が再開するまでに1万9,000人以上の生徒が授業を受ける予定です



→カメルーンでは、子どもたちが感染を予防し安全に教室で過ごせるように、学校に手洗い場を設置し、マスクや消毒液などの衛生用品を提供しました



モザンビークでプランの活動に参加する16歳のオリシアさんは、「医療機関が閉鎖するなどで診察を受けられない状況が続き、受診が必要な若い女の子や女性に影響を与えています」と話します

3 生理の悩みを解決し、早すぎる妊娠を防ぐ

医療機関の閉鎖や休校により、思春期の女の子に対して性と生殖に関する健康と権利についての必要な情報を提供する機会が減ってしまいました。実際に、望まない妊娠などの相談件数が増えてきています。プランはSNSやコミュニティラジオなどを活用し、女の子たちに必要な情報を提供したり、生理用品や下着、洗濯石けんなどの衛生キットを配布したりするなどを続けています。

2 子どもたち、女の子たちを暴力から守る

自宅で過ごす時間が増えると、虐待や性暴力などが増える傾向にあります。こうしたことを防ぐために、プランが主催する子どもクラブや若者クラブのメンバーが中心となって、地域での啓発活動を行ったり、テレビやラジオ、SNSを通じた啓発メッセージを発信しています。そのほか、地域のボランティアによる個別訪問や被害を受けた女の子への支援なども続けています。



フィリピンでは、女の子や若い女性を中心に、子どもの保護、ジェンダーに基づく暴力の事例を報告するための研修を実施。18歳のレイリンさんはこの研修に参加した女の子の一人です。「プランの研修を受けて、私は女性として虐待から守られる権利があることを学びました。私を守ってくれる法律があるのです」



エチオピアでは、コミュニティの人口密度が高い地域に5,000リットルの水を供給できる一時的な手洗い施設を10カ所設置しました。平均して、1日に約1,000人が手洗い場を利用しています。消防局と災害リスク管理委員会と協力し、毎日無料で給水タンクに水を補充しています

5 水と衛生、保健サービスへのアクセスを改善する

プランの活動地域では、感染予防の基本である手洗いのできる衛生的な環境が整っているところは、そう多くありません。しかし、日ごろから地域で活動を行っているため、どこに手洗い場を設置すべきか、人々にどのような衛生環境や情報を提供するべきかを把握していたので、多くの地域で迅速に対応をすすめることができています。

4 経済的に厳しい家庭をサポートする

都市封鎖や外出自粛により、仕事を失ったり、経済的に厳しい状況に直面したりする家庭が増えています。プランは、食料支給のほか、移民やもっとも弱い立場にある世帯への現金支給などを続けてきました。しかし、長期化が予想されるこのパンデミックの中で、仕事を立て直したり、新しい仕事を見つけたりする生計向上を後押しする支援も欠かせません。



インドネシアに住む28歳のダマリスさんは、プランのプロジェクトで有機農業を学びました。唐辛子やトマト、豆などを栽培するほか、地域の人々にも知識を伝えることで、人々の生計向上の一助となっています。「パンデミックの間もプランはずっと私をサポートしてくれました。生計手段を持たなかった自分が安定した収入を得られるようになり、緊急時に強みとなっています」

エチオピア

成果をあげつつあるFGM/C撲滅プロジェクトが周辺地域に拡大

世界で2億人の女の子や女性が施術を受けたといわれる
女性性器切除（Female Genital Mutilation/Cutting: FGM/C）。
プラン・インターナショナルが2017年7月からサウス・エチオピア活動地域で実施した
「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクトと、今後の展開についてご紹介します。



レポーター：
プログラム部／道山恵美職員





「FGM/Cをなくそう」とメッセージを送る女の子

FGM/Cとは？

女性外性器の一部もしくはすべてを切除する、あるいは医学的治療以外の理由で女性性器を傷つける行為です。多くは15歳になる前に施術を受け、出血多量や感染症によって死に至ることもあります。また、分娩合併症や心の傷など心身に多大な影響を及ぼすこともあります。

なぜFGM /Cを行うのか？

宗教や伝統文化と結び付けて語られることもありますが、多くは「昔から大人の女性になるために必要とされているから」という、見えないルール（社会規範）――つまり、「みんながやるべきと考えるからFGM/Cをやる」というのが現状です。

FGM／Cに対抗するTACLEプロジェクト

エチオピアで実施したプロジェクトは、TACLE（フランス語で「対抗する」の意）プロジェクトと呼ばれました。そこではおもにFGM／Cを「知る」活動と、施術を受けて傷ついた女の子たちの「サポート」活動を行ってきました。

「知る」活動

- 学校でFGM／Cや早すぎる結婚の現状を学び、生徒たち自らが考えを発信する
- 過去に施術していた女性たちにその弊害を理解してもらい、FGM／Cをなくす活動に参加してもらう
- コミュニティで男性も交えた対話を行う
- ラジオなどメディアを通じて情報を発信する

「サポート」活動

- 実際にFGM／Cを受けた女の子や女性、その家族に対するカウンセリングや医療機関へ照会する
- その後のフォローや警察・司法を含む行政と連携する

本当はみんな続けたくない

2016年の調査によると、シェベディーノ郡があるサウス・エチオピア活動地域では、この慣習を継続すべきと考える女性は約15%、男性は5%しかいませんでした。「みんながやるから自分も」という同調圧力がある中で、「実はこの慣習を継続すべきと考える人は少ない」ことにどのように気づいてもらうかが、プロジェクトの鍵でした。

ただ、性や生殖に関わることは、非常にデリケートな問題です。働きかけの方法を間違えると、プランのやり方や考え方、そして支援そのものを拒絶されてしまう危険性があります。そのため、このプロジェクトは非常に慎重に行われてきました。

10年以上の活動で培った信頼関係

プランは、2003年にサウス・エチオピア活動地域での活動を開始しました。「プラン・スポンサーシップ」などの支援を通じて、教育、水や衛生、保健といった諸課題について地域の人たちと一緒に取り組み、徐々に信頼関係を築いてきました。この信頼関係をもとに、FGM／Cについて地域の人と話し始め、行政やコミュニティリーダー、学校や警察といった影響力をもつ人たちと協働することが可能となったのです。

もう一つ重要なことは、プロジェクトを一過性のものとせず、ある程度の時間をかけて取り組んできたことです。TACLEプロジェクト自体は、2017年7月から日本の支援により実施していますが、プランはその7～8年前から、この地でFGM／Cの課題に取り組んできました。「なぜやるべきか」「本当に皆がやるべきなのか」といったことを、さまざまな立場の人の考えを聞き出しつつ、本当の思いはどこにあるのか、丁寧に語り合いを深めてきました。

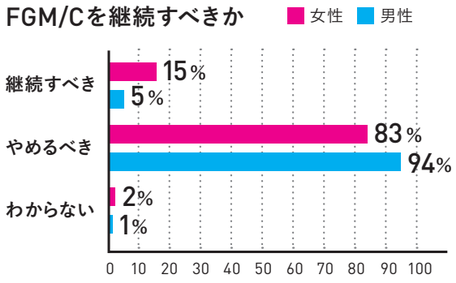
このプロジェクトの正式な評価はこれからですが、施術を受けた女の子へのカウンセリング事例が減少していること、また、住民との日々の対話からも、「FGM／Cをなくしていきたい」という考えが広く浸透してきていることを実感しています。

経験を生かして活動地域を拡大

2020年7月からは、FGM／Cの実施率がもっとも高い地域の一つであるスーダンのホワイト・ナイル活動地域で、このプロジェクトの活動がスタートしました。そして2021年1月からは、エチオピアのアムハラ活動地域にも活動が広がります。

プランはこれらの地域でも、「この慣習を変えていきたい」と思う人々の思いが発信されるようサポートしつつ、政治家への勉強会や現地の市民団体との連携などを通じて、エチオピアとスーダンでFGM／Cを禁じる法律が確実に執行されるよう働きかけを行っていきます。

周りと同じようにふるまわないと社会の一員として認められないといった同調圧力は、時代や社会によっては個人では解決できないことも多いものです。しかし、勇気をもって声を上げようとする女の子や、さまざまな立場の人たちを、ぜひ日本からも応援していただければと願っています。



Etiopia Demographic and Health Survey 2016 を元に作成



学校でのクラブ活動で、FGM/Cや早すぎる結婚などについて意見を交わす女の子たち



FGM/Cを「施術する」側から「なくす側」へ。
プランとともに活動する元施術師の女性たち



プランスタッフと住民たちの対話は、長年継続的に行われてきました

「ガールズ・プロジェクト」のご支援をお願いします

●死に至ることもある慣習
「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクト

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください

トーゴ

障がいのある子どもの教育支援
クンバが生きていくために必要なこと

西アフリカにあるトーゴは、細長い小さな国で、人口の多くを子どもや若者が占めており、多くの人々が農業に従事しています。グローバル・プロジェクトを実施する中央州モ県も、農村地域です。すべての子どもがともに学び、夢を実現できる社会を目指すこのプロジェクトについて、ある女の子のストーリーを通じてご紹介します。





トーゴの中央州モ県で暮らす11歳の女の子、クンバは生まれつき耳が聞こえません。聴覚障がいのない両親やほかのきょうだいとは、ジェスチャーや黒板を使ってコミュニケーションをとっています。

聾（ろう）学校は自宅から遠いため、クンバは近くの小学校に入学しました。しかし障がいのない子どもに合わせた授業では、授業についていくことも、先生や同級生とコミュニケーションをとることも難しく、クンバはいつも一人ぼっちでした。



ある日、クンバが通う学校で、プラン・インターナショナルが実施するインクルーシブ教育についてのセッションが行われました。「障がいや貧富の差、居住地による区別なく、すべての子どもたちが同じ学校で一緒に学ぶこと」をインクルーシブ教育といいます。

これを実現するには、いろいろな子どもたちに合わせた学びの仕組みを整備したり、子どもと学校を取り巻くすべての人々に理解してもらわなければなりません。

プランはクンバの学校を含め、49の学校でインクルーシブ教育やその方法を話し合う勉強会を行い、保護者や地域の人々にも理解してもらえるよう、丁寧に説明を続けました。



すべての子どもが守られ、ともに学べるように

解説：プログラム部　村松良介職員

トーゴの遠隔地に位置するモ県では、障がいは「呪い」と見なされるなど、障がい者への差別が根強く残っています。学校も、施設の設計から授業の教え方まで、個々の子どもの特性に対応できていません。そして新型コロナウイルスの感染拡大のような緊急事態時に取り残されがちなのは、クンバさんのように障がいのある子どもたちです。プランは、現地の政府や学校職員、保護者・地域、そして子どもたちとともに、すべての子どもが守られ、ともに学び、夢を実現できる社会を目指して活動を続けています。

illustration by Noriyuki Goto



聴覚障がいや視覚障がいをはじめ、いろいろな障がいに関しての集中トレーニングを受けた先生たちは、クンバだけでなく、生徒全員がわかるように、黒板の字を大きく書いたり、大きくはっきりした声で説明したりすることを心がけました。また、ノートに書き終わるまで、黒板を消さずに残すようになりました。同級生も、手紙やイラストを通じて、クンバとコミュニケーションをとるようになりました。



こうしてクンバの学校生活が順調にいきはじめた矢先、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために学校が休校になりました。

「なぜ学校に行けないの？　なぜマスクをしないといけないの？」十分な情報が得られず、クンバの不安は募りました。

そこでプランは、ニュースレターを通して、新型コロナウイルス感染症に関する情報や予防方法を伝えました。また、外出ができないストレスから生まれがちな家庭内暴力などのリスクと身を守る方法について、手話付きのビデオを作成しました。



6月になり、最終学年であるクンバの学年は授業を再開しましたが、まだ感染症拡大の可能性があり、緊張は続いたままです。それでも、学校や学ぶことが好きになったクンバは、前向きに将来を考えられるようになりました。

「将来はみんなの役に立てる助産師さんになりたいです。昔の私なら『どうせ無理』と諦めていたと思いますが、いまは違います。これから手話を学んでたくさん勉強したい。先生や両親、そして周りの人が協力してくれたら、きっとなれると信じています」

「グローバル・プロジェクト」のご支援をお願いします

●どんな子も教室から排除しない

「障がいのある子どもの教育支援」プロジェクト

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください

「女の子だから」をなくしたい。8年間にわたり支援を継続中

2013年から8年間で6カ国9つのプロジェクトをご支援いただいている
シチズン時計株式会社の皆さんに、支援のきっかけやご意見などをうかがいました。



お話をうかがった高塩さん(左)と北野さん(右)

シチズン時計株式会社
CSR室 **北野令子さん**　宣伝部宣伝課 **高塩万莉枝さん**

次世代を生む女性を女性向け腕時計で支援

弊社では「市民に愛され市民に貢献する」という企業理念のもと、よき企業市民として、地域社会との共生を大切にし、社会貢献活動に努めています。

プラン・インターナショナルとは、2013年の「パキスタンにおける女の子の教育プロジェクト」に始まり、アフリカやアジアで「早すぎる結婚対策」「女の子の生計向上支援」「女の子の理数科学力向上支援」「月経衛生管理」などのプロジェクトを支援させていただいています。

きっかけは、8年前に遡ります。弊社のCSV活動(※)担当部署からの支援先提案の一つに、プランの名前があがったこと、また、同じタイミングで女性社員や担当役員が、プランの「Because I am a Girl」の車内広告を見かけていたことが重なりました。

衝撃的なコピーと、「女の子だから」という理由だけで、「10代で結婚させられる」「学校に行かせてもらえない」といった内容にぐっと心を掴まれ、「次世代を生む女性への支援が、世界が直面している課題の解決に繋がる。これは弊社が目指す方向に一致する」とスムーズに支援が決まりました。弊社の女性用時計ブランド「シチズン クロスシー」の売り上げの一部を寄付させていただくことになったのは、クロスシーが「女性が身に着けることで勇気がわき、前向きな気持ちになれる」そんな思いを込めたブランドだからです。



「ネパールにおける月経衛生管理プロジェクト」に参加し、再利用可能なナプキンを作成する女の子たち

自分の家族に置き換えて社員の意識にも変化

とはいえ、実際に支援をスタートして、プランの担当者から早すぎる結婚についての過酷な現状を聞いたときには、「果たして私たちはその現実を背負うことができるのか」と、メンバーで話し合いを持ったほどでした。最終的に早すぎる結婚の数を減らすことができましたが、プロジェクトが終わったからといって解決したわけではないことを痛感し、以降は、すでに結婚を強いられてしまった女性にむけた収入増加のプロジェクトや、女の子への教育支援のプロジェクトへ支援をつなげています。

現地の風習や常識を変えていくことは短期間では困難ですが、プランの場合は、長年の地域に根差した活動を通じて、現地の方々との信頼関係を築いています。現地のことをもっとも理解されているので、「今現地で一番必要とされる支援を教えてください」とお願いしています。

ここ数年でお客様から「購入者も社会貢献活動に参加できてうれしい」といった共感のご意見をいただけるようになり、より社員の関心も高まっています。プランの報告会で「月経衛生管理プロジェクト」の話を聞いた男性社員は、自分の家族に置き換えて真剣に考えたようです。今後も社員一人ひとりが「市民を社名とするわれわれが、市民のために何ができるか」を考え、さまざまな活動に参加していきたいと思います。



「マリにおける女の子の早すぎる結婚対策プロジェクト」で早すぎる結婚のリスクについて学ぶ女の子たち



売上の一部を女の子支援プロジェクトにご寄付いただいている「シチズン クロスシー」

※CSV=Creating Shared Value 。企業が事業領域に関連性を持たせながら社会的課題などの問題解決を行うことで、その企業の持続的な成長へとつなげていく活動

子どもたちの澄んだ瞳に感激したカンボジア訪問

「カンボジアの水と衛生環境改善プロジェクト」に続き、「ベトナムにおける就学前教育施設建設プロジェクト」にもご支援いただいている堀内さんにお話をうかがいました。



堀内満さん。現地訪問に同行されたお嬢さんと

堀内 満さん



水が供給されている地元の小学校を訪問。水道ができてから児童たちは手の洗い方なども学んでいる

引退後に果たした念願の現地訪問

これまでに30年以上にわたり、プラン・スポンサーシップや単発の支援をさせていただいています。私の行動指針は「すべての事柄は現場を知ることから」なので、この間「いつか現地へ」という思いは常にありました。しかし経営者として会社を切り盛りしていたため、実行に移すことができずにいました。「カンボジアの水と衛生環境改善プロジェクト」は経営を退いた後にスタートしたので、プロジェクト完了時には必ず現地訪問をしようと決めていました。

ひとつの貯水施設の水が11の村の助けに

見学した屋根付きの貯水施設では、井戸水を三回浄水して飲み水にしていました。ボトルに入れて11村2,700人もの人々に供給されていること、さらに現地の雇用も生まれていることを聞き、うれしく思いました。

小学校を訪問するにあたり、子どもたちへのお土産を現地で手配してもらいました。わずかな金額にもかかわらず、100人以上の子どもたち全員に行き渡る文具と、共有のボールをご用意くださいました。一人ひとりに手渡しさせていただいたのですが、どの子もキラキラした笑顔で宝物を扱うように受け取ってくれました。今まで行ったどんな旅行よりもよい思い出です。

プラン・インターナショナルが実施するプロジェクトは、私のようにお金の支援をする人のほかに、日本および現地にいるたくさんのスタッフやボランティアさんたちがいて初めて実行できる。それを直接感じられたことも、大きな収穫でした。

進行中の「ベトナムにおける就学前教育施設建設プロジェクト」に継続して支援を決めたのは、このカンボジアでの体験があったからにほかなりません。







浄水システムを備えた貯水施設。できた飲料水をボトルに入れて各村へ。配送用のオート三輪も支援により購入された

利益追求で失いかけた人生の目的を取り戻す

「衣食足りて礼節を知る」という言葉の通り、衣食が足りなければ、他人を思いやることはできません。戦後すぐの日本と同じように、世界には食べることさえ十分でない国がいまだにたくさんありますから、より多くの支援の必要性を感じます。

一方で、バブル期、私は家族や社員のためにがむしゃらに働きながらも、利益優先の日本社会に生きる目的を失いかけました。そんな折にプランの広告を見て支援を始めてから、少しずつ人の役に立つ自分を認識できるようになりました。だからこそ微力でも支援を続け、その輪を広げていきたいと思います。



プラン・ランニング部のメンバーとして、走って広める活動もしてくださっています

遠い国の男の子の親になりました！

手紙を通じて成長の過程を母親のような気持ちで見守っています

プラン・スポンサーシップをスタートしたばかりのスポンサーの方へのインタビュー。
短期間で頻繁に交流を続けられている木内さんに、書き方のコツもうかがいました。

スポンサー **木内あゆみ**さん　チャイルド **ヤン**さん（9歳）／カンボジア

手紙を通じてチャイルドの成長を感じます

2019年3月から、カンボジアの9歳の男の子、ヤンさんと交流をしています。

初めてもらった手紙には、果物が描かれていました。「オレンジ」と英語で書かれているほかに文章はありませんでした。

そこで、こちらから返事を書く際、その日あったできごとや気候、日本の行事のことなどを書いて、最後に疑問形の文章でまとめるようにしました。たとえば、「今、日本は冬で、家の中にいても寒いです。カンボジアはどう？」とか、「夕食にこんなものを食べました。ヤンさんはどんなものを食べているかな？」といった具合です。

勉強を兼ねて、私からの手紙は英語で書きます。とはいえ、書くハードルは下げて、短文で全体が6～10行くらいにまとめます。これをプラン・インターナショナルでカンボジア語に翻訳したものが、ヤンさんに届きます。

この方法がよかったのか、2回目以降の手紙は、ヤンさんの言葉を大人が代筆した文章になり、私からの質問への答えや、好きなことなどを教えてくれるようになりました。紙とペンで手紙を書くのは数年ぶりだったので、新鮮なやりとりです。

一方で、新型コロナウイルスの感染拡大により、お手紙も滞り、とても心配になりました。マスクはしてるかな、手洗いは大丈夫かな、と母親のような気持ちです。でも、プランのウェブサイトで各国の情報を読んだり、オンラインサロンに参加して現地でも活動が完全に止まっているわけではないと知り、安心しました。

継続支援できるかと躊躇していました

学生時代から、さまざまな国を旅行してきました。フィリピンでは、ビーチでお金になるゴミを集めていた子どもたちから「ここでは子どもが働いて、大人は家でのんびりする」と聞きました。タイでは、小さな子どもが、見物料やチップを目当てにムエタイ（タイの格闘技）の試合に出ていました。

子どもたちが家計を助けるために働かなければならない現状を目の当たりにするたび、いつか支援をしようと決めてはいたものの、「始めるなら継続して支援しなければ意味がない。その責任を負えるだろうか」と躊躇してしまっていました。

思い切って支援をはじめてから、ヤンさんからの手紙が楽しみです。届くとうれしくて、SNSで「カンボジアから素敵な手紙が届きました」「こんな手紙が書けるようになりました」などと紹介しています。これまで旅の選択肢になかったカンボジアが今は身近になり、歴史を調べたりニュースをチェックしたりしています。



チャイルドのヤンさん。最初に届いた写真（右）より、1年で一気に成長したのがわかる

ヤンさんから届いた手紙の一部。国語が好きで、将来はドクターになりたいそう

木内さんとヤンさんのこれまでの交流記録

- 3月 2019年：支援開始
- 4月：交流スタート。ヤンさんから初めて、果物の絵が描かれたお手紙が届き、お返事を送る
- 6月：ヤンさんからお手紙が届く
- 7月：ヤンさんへお手紙を送付。4月のお手紙のお返事が届く
- 8月：プランから「1年の歩み」が届く
- 9月：カレンダー付グリーティングカードを送る。7月のお手紙のお返事が届く
- 12月：ヤンさんからお手紙が届く
- 1月 2020年：ヤンさんへお手紙を送付。9月のお手紙のお返事が届く

アドボカシー

オンライン・ハラスメント調査からみえること

アドボカシーチーム／長島美紀職員



UN Womenの調査によれば、およそ4人に3人の女性がオンライン上での暴力を受けている

「オンライン・ハラスメント」という言葉を聞いたことはありますか？

「オンライン・ハラスメント」とは、インターネット上における中傷や嫌がらせのこと。SNS（ソーシャルメディアサービス）の普及によって、急速に増えています。具体的には、SNSを使ったストーキングやいじめ、ハラスメント、名誉毀損、ヘイトスピーチ、搾取、迷惑行為などがあげられます。プラン・インターナショナルでは特に、女の子や若い女性に対して行われる、性別に基づいたハラスメントや、有害なジェンダー規範を増長させる発言、オンライン上でのジェンダーに基づく迷惑行為などを「ジェンダーに基づくオンライン・ハラスメント」として、問題提起を行っています。

日本では今年5月に、SNSでの嫌がらせや本人を傷つける発言によって、人気女性プロレスラーの方が亡くなったことで、オンライン・ハラスメントという言葉が大きく取り上げられるようになりました。しかしそれよりも前から、女性へ向けられるオンライン・ハラスメントの問題は指摘されていました。民間企業が行った調査では、調査対象の約2人に1人が何らかの被害にあい、約3人に1人（32％）がネット上のセクシャル・ハラスメントを経験したことが分かっています（シマンテック コーポレーションによる2017年の調査結果より）。

アドボカシーチームはプラン・ユースグループとともに、ジェンダーに基づくオンライン・ハラスメントについて、インターネットを通じたアンケート調査やインタビューを実施。現在、その結果の分析・評価を行っています。調査結果は10月11日の国際ガールズ・デーにあわせて、プランのウェブサイトで公表します。ぜひチェックしてみてください。

開発教育

教材を無料公開 ～3つのワークで途上国の今を知る～

プランのウェブサイトから無料でダウンロードできる開発教育教材を公開しました（制作：プラン・フレンズ／制作協力：プラン・インターナショナル）。教材は以下の3種類です。

ワーク1
「私が世界の大統領になったら」

ワーク2
「考えてみよう！ 支援で変わる女の子の未来」

ワーク3
「途上国に学校を建てよう！」

途上国のジェンダーや女子教育の問題について、楽しみながら学べる新しい教材です。国際理解教育や研修等に是非ご活用ください。ご意見、ご感想もお待ちしています。

ダウンロードはこちらから

教材に関するお問い合わせ（プラン・フレンズ）
E-mail：
planfriends@yahoo.co.jp



かわいいイラストがたくさん使用されています



COFFEE BREAK　職員が紹介するカルチャー

気軽に南米気分を味わえる
パラグアイのソウル・ドリンク「テレレ」

紹介する人：リレーション開発部　**関根真美 職員**

日本でも「マテ茶」はかなり知名度を上げましたが、「テレレ」とは冷たいマテ茶のことです。マテ茶はアルゼンチンやチリを中心に飲まれていますが、内陸国でジャングルも有するパラグアイは、亜熱帯気候やトロピカルサバンナ気候など、一年を通して暑い国。人々は、冷やしたテレレを大きなジャーに入れて持ち歩き、日中も水を注ぎ足して飲み続けます。


2019年東京マラソンのようす

詳しい情報はこちら

東京マラソン2021 チャリティへのご寄付を募っています

東京マラソン2021チャリティでも、プランは寄付先団体として選ばれました。「世界の女の子に、生きる力を。教育や自立を支援して早すぎる結婚にNOを！」と題してプロジェクトを継続、新型コロナウイルス感染症拡大でもっとも影響を受ける女の子たちの支援も行います。皆さまからのご寄付をお待ちしています。

1万円以上のご寄付をいただいた方にはプランのオリジナルTシャツをプレゼント。東京マラソン2021チャリティ公式ウェブサイトよりお申し込みください。

東京マラソン2021チャリティ
公式ウェブサイト
https://www.marathon.tokyo/charity/

ギフト・オブ・ホープにたくさんのご参加 ありがとうございました！

2019年度の「ギフト・オブ・ホープ～子どもたちにクリスマスプレゼント・お年玉を贈ろう～」は、たくさんの方にご賛同いただくことができました。バングラデシュ、ネパール、ヨルダン、ブルキナファソ、トーゴ、エチオピアの子どもたちへ、ギフトが届けられています。

バングラデシュの「少数民族の女性たちの収入アップ」プロジェクトでは、女性たちが畜産のスキルを身につけて、自分の力で収入を得られるようになりました。エチオピアの「女性性器切除から女の子を守る」プロジェクトに合わせ、生理用ナプキンキットを受け取った女の子たちが布ナプキンの作り方を学び、生理中であっても学校に通えるようになりました。皆さまからの温かいご支援に改めて感謝申し上げます。


収入アップのための家畜を受け取ったバングラデシュの少数民族の女性

あなたも参加しませんか？

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

「プラン支援者の会」は、全国各地の支援者の皆さまが任意で活動を行っています。「ほかの支援者のみなさんと話がしたい」「志を同じくする方々と楽しく活動がしたい」とお考えの方、お近くのプラン支援者の会に参加してみませんか？

※いずれのイベントも、新型コロナウイルスの感染状況によっては断りなく中止となる場合があります。

W ウェブサイト f フェイスブック　左記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai

多摩SP会 f

「職員報告会」
- 日時：10月17日（土）　9時30分～11時30分（受付9時～）
- 会場：立川市子ども未来センター/立川市錦町3-2-26
- 内容：プラン職員による講演
  「新型コロナウイルス対策緊急支援の中間報告～医療体制が脆弱な地域での感染拡大を防ぐために～」
- 参加費：無料　※事前申込不要
- 連絡先：矢島

Mail: tama-web3@ngo-npo.org

プラン千葉 W

「秋の例会」
- 日時：10月18日(日)　13時15分～16時30分
- 会場：千葉市民会館　会議室/千葉市中央区要町1-1
- 内容：チャイルドへの手紙書き、ほか
- 参加費：プラン千葉の会員、非会員にかかわらず、一律500円(1人)
- 定員：先着30名
- 申込締切：10月16日(金)
- 連絡先：前田

Mail: e_maeda@yellow.plala.or.jp

プラン広島の会 f

「支援チャイルドへのお手紙書き」
- 日時：10月18日(日)、11月15日(日)、12月20日(日)　14時～16時
- 会場：広島市まちづくり市民交流プラザフリースペース(3Fまたは2F)/広島市中区袋町6-36
- 内容：チャイルドへのお手紙書き会
- 参加費：無料　※事前申込不要
- 連絡先：小村

Mail: naokomura@kej.biglobe.ne.jp

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：リレーション開発部　Mail: p-kai@plan-international.jp
※「プラン・ニュース」No.116は、2021年4月上旬にお届け予定です。

プラン・スポンサーシップでご支援いただいている皆さまへ

チャイルドへのお手紙はオンラインで受付中です

活動国の現地事務所では新型コロナウイルス感染症の拡大防止にむけた対策に注力しており、チャイルドへのお手紙のお届けなどに遅れが生じています。

こうした状況から、事務局ではこれまでに届いている皆さまからのお手紙で現地に発送ができないものについては、引き続き大切にお預かりし、状況が改善され次第、順次現地へ発送してまいります。

また、現在のところ皆さまからの郵送でのお手紙・ギフトの受付も一時的に停止させていただき、当面はオンラインのみでの受付とさせていただいております。オンラインでお送りいただいたお手紙は、データの形で現地事務所へ送信いたします。皆さまの引き続きのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。



手紙送信フォームでは、季節のイラストや誕生日用の便箋をお選びいただけます。また、お好きな写真をアップロードしていただくこともできます。「日本からこんにちは」「久しぶりのおたより」などの英語定型文を選択いただけるほか、フリーメッセージ（500字まで）も入力できます。

オンライン手紙送信フォームはこちら

※上記の内容は今後の状況の変化により、変更になる可能性があります

マイ・プラン・ページにご登録はお済みですか？



トップページには、支援者の方に関連する最新のお知らせが表示されます

マイ・プラン・ページにご登録いただくと、手紙送信フォーム上でチャイルド情報などが自動入力されるため、より簡単に送信できます。また、ご支援内容や限定コンテンツもお読みいただけます。

ご登録はこちら

「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン2020」へのご協力ありがとうございました

書き損じや未使用のはがきが途上国の子どもたちの支援につながる本キャンペーンに、今年も多くの方がご賛同、ご協力くださいました。

新型コロナウイルス感染症拡大により、集計作業ができない学校もあり、途中経過報告となりますが、8月現在、約134万円のご寄付をいただいています。厳しい状況下で途上国に思いを馳せ、工夫して作業くださった学生有志の皆さまにも心より感謝申し上げます。



「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン2020」のフライヤー

プランへの寄付となる商品のご紹介

「SAZABY」が寄付付きバッグを販売

株式会社サザビーリーグはBecause I am a Girl キャンペーン（以下、BIAAG）に賛同し、2020年10月より、「ベーシック」「使いやすさ」「上質さ」をコンセプトとしたバッグを通して女性を応援するブランド「SAZABY」から、売り上げの一部がプランに寄付されるショルダーバッグを販売くださいます。

いただいたご寄付は、ガールズ・プロジェクトに役立てられます。バッグ内装のSAZABYネームには、BIAAGカラーであるマゼンタを使用しています。

詳しくは下記ウェブサイトをご覧ください。
https://sazaby.net/



届け！女の子たちのメッセージ

プラン・インターナショナルの活動地域から

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、国際社会が数十年をかけて改善してきたさまざまな歩みを、たった数カ月であっという間に後退させています。多くの取り組みが中断を余儀なくされ、弱い立場に置かれた人々、なかでも女の子に深刻な影響を及ぼしています。でも、彼女たちはくじけていません。パンデミックのなかで到来しつつあると言われる“New Normal”（新しい日常）に期待することなど、彼女たちが発信する力強いメッセージをご覧ください！

農村部の女の子たちに、質の高い教育を



Paraguay
イェニファーさん

パラグアイの農村では家事は女の仕事と言われ、女の子はあまり学校に通えません。でも「女性にはほかにすべきことがある」とイェニファーさんは考えます。

女の子がハッピーで、怖がる必要がなく、守られる世界に



Honduras
ファニさん

ホンジュラスに暮らすファニさんは、学校に通うのも怖いと感じています。「怖がらずに学校に行けるようになること」――それが彼女の願いです。

Nicaragua
スサナさん

ニカラグアの新しい日常は、「女の子が怖がらず、自信をもって暮らせる日常」になるべきと考えるスサナさん。そのために彼女も努力を続けます。

自信をもっている女の子は幸せな女の子



Mozambique
ロサーナさん

モザンビークのロサーナさんは「私が暮らす地域では、性について話すのはタブーです。私は大人たちがもっと心を開けるよう挑戦したい」と言います。

自分の性や生殖に関することをもっと知りたい



恐れることなく安心して歩けるように



Haiti
クリスデリーさん

クリスデリーさんがパンデミック後の新しい日常に望むのは、「ハイチが女の子にとって、もっと安全な国になってほしい」ということです。

男の子、女の子、若者たちが平等に発言できる世界を



Dominican Republic
カルメンさん

ドミニカ共和国のカルメンさんは、差別の撤廃を望んでいます。特に、「アフリカ系の女の子に対する差別」がなくなることを強く願っています。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルの
Facebook、Instagram 、Twitterで活動国の情報や
事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。



表紙写真ストーリー

笑顔が素敵な女の子の写真は、グローバル・プロジェクト（P8-9）で紹介したトーゴから。「障がいのある子どもの教育支援」プロジェクトを行っているモ県では、「障がいは呪い」といった誤った考え方が根強く残っています。「クラスメートが優しく接してくれる上に、私の障がいが神様の天罰じゃなくて、病気のためだと分かってくれて、とてもうれしい」という女の子の言葉が印象的です。

PLAN NEWS
2020 AUTUMN NO.115

表紙写真：トーゴ

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

※当面の間、ご連絡はウェブサイトの「お問い合わせ」フォームよりお願いいたします。